

令和3（2021）年度 第3学期終業式 および中学卒業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

ついにコロナ禍はその始まりから丸2年が経過して、それでもなお終息の見通しが立たない中で、私たちは再び年度末を迎えました。さすがに2年目ともなれば、前年度の経験から学んだことに基づいて、計算された運営ができるものと考えられるところですが、それが極めて難しいのがこのコロナ禍の特徴であることを、私たちは思い知らされました。もちろん、皆さんをはじめ学校に関係するあらゆる人たちの安全を最優先して感染防止策に細心の注意を払うわけですが、そのなかでも皆さんの学びの機会をどのように確保していくか、そのバランスを図るのが常に学校に課せられた課題でありました。様々な情報をもとにして次なる運営形態を判断する際に、コロナの状況の経過はいつも予想を超えてきました。次はどうするか、それにいつも悩まされ、翻弄されてきたように思います。皆さんには、予定変更のアナウンスをいったい何度投げかけたでしょうか。極端な時には、一週間ごとに次の予定を更新させてもらったこともありました。皆さん自身も、きっと少なからず混乱していたのではないかと思います。申し訳ない気持ちになります。しかし、皆さんは常に落ち着いて状況を捉え、自分自身の為すべきことをしっかりと理解してそれに取り組んできたと思います。そしてさらに、この状況下で自分たちにできることを前向きに考えて、それを積極的に広げてくれたと思っています。だからこそ体育祭を開催することができたのだし、文化祭はさらに安定した運営で成功を収めることができたのです。また、高校2年生の修学旅行、中学3年生の研究旅行においても、その実現には生徒諸君の主体的な取り組みが必須の要素であったのは言うまでもありません。部活の合宿など、平常時と比べればまだまだできなかったことが多くありますが、来年度以降の可能性を確実に広げることができたという意味で、皆さんの取り組みは高く評価されるべきであると考えています。

それにしても、3学期になってからのオンライン授業期間は、いろいろな意味で大打撃となりました。今までになく感染が身近に迫ってきていた実感を皆さんも持っていたと思いますが、その影響も小さくなかったかもしれません。戸惑いや不安の中で生活のペースが乱れ、それが学習にも及んでしまった人も少なからずいたのではないかと推察します。昨年度はじめの長い自宅学習期間においては、それまで経験したことがなかった事態に緊張感もあったかと思いますが、今回は、正直言ってもううんざりだという緩慢な気分が社会においても支配的であったので、そんななかで気持ちを立て直すことができなかつたとしても、ある程度致し方ないのではないかと思います。その後、どうにか登校を再開して学年末試験を実施しましたが、今の皆さんの心のありようは如何ですか。自らをふり返ってみてほしいと思います。

不安や戸惑いや動揺は、もしかしたら、“他人事ではない”として語られるウクライナの戦禍の報道に接したこと、あるいは先日の大きな地震によって甦った大震災のイメージに触れたことをきっかけにして、私たちの心にたやすく起こってくるものなのかもしれません。ここで皆さんにお願いしたいのは、そういった心の揺れを、身近な人に語ってほしいということです。「語ること」は私たちを不安から救ってくれるものであるように思うのです。

さて、今年もまた《3・11》を迎えて、さまざまな祈りの言葉が取り交わされました。社会全体を見るに、震災をもはや忘れかけている部分がある一方で、まだあの時と何も変わっていない部分も厳然としてあるのだということが、改めて示されたように感じます。私はこの度、その何も変わっていない、つまり「取り残された」部分の一つのあり方を示す概念として、「コールドポイント」という言葉と出会いました。これは、東北学院大学教授として環境社会学を研究されている金菱清（かねびしきよし）さんとそのもとに集った大学院の学生たちが、震災で起こったことへの感受性を鈍らせることのないように記録していこうという趣旨で6年前に上梓した『呼び覚まされる霊性の震災学』という本の中で、金菱さん自身が示している観点です。金菱さんはここ

で、高校生の息子を持つ一人のごく普通の女性が、自身は自宅マンションにいて津波の被害には遭わなかったものの、石巻市の海近くにあった実家は甚大な被害を受け、そこで愛する両親を失った様子を紹介しています。当時の報道は当然のことながら“被災地”にスポットライトを当て、競うようにその惨状を書きたてていたし、精神的な側面も含めたあらゆる支援の手も、より悲惨な経験をした“被災者”にばかり向けられて、被災もしておらず年老いた両親を亡くしただけの普通の中年の女性は、ひとり取り残されていったというのです。悲惨さを強調したうえで、「絆」をキーワードに「がんばろう」と声を掛け合った「ホットポイント」が脚光を浴びていた裏で、社会的に見過ごされた人が一人きりで孤独感を深めるしかなかった「コールドポイント」が生じていたという指摘には、ドキッとさせられました。そして、その女性に立ち直るきっかけを与えたのが、何と《スピーチコンテスト》への参加であったというのです。睡眠薬を過剰に摂取し、毎夜酒におぼれる状態であった彼女は、当然はじめは乗り気でなかったそうです。しかし、震災にまつわる自身の経験を、聞く人に伝えるための言葉に起こしていくうちに——それはもちろんこの上なくつらい作業であったと言いますが——、《コンテスト》で競っている人たちが、ライバルではなく思いを共有する仲間であることに気づいていったというのです。そして、以前は「あなたはひとりじゃない」と優しく呼びかける公共広告に怒りをぶつけていた彼女も、いつか《スピーチコンテスト》の運営に積極的に関わるまでになったそうです。これはまさに、「語ること」がひとりの人を孤独から救い出した典型例であると思いました。

震災から11年が過ぎ、世界情勢はますます混迷を深めています。いましばらくコロナ禍にも翻弄され続けるのではないかと考えると、「語るこそが人を救う」ということの意味を改めて考え、同時にその「語り」に耳を傾けることにも心を砕きたいという思いを強くします。

ちなみに今日ご紹介した本は、震災で亡くなった人の霊を乗客として乗せたタクシードライバーの証言を集めた論文が掲載され、大反響を呼んだものです。昔から東北地方の殊にこの地域では、死者の霊を迎える風習について民俗学的によく語られています。この地域の“風土”とも言える素地を思い、非常に興味深く感じます。それは、他者の「語り」に耳を傾ける温かさ、相通じるものなのかもしれません。

さて、中学3年生諸君、ご卒業おめでとう。いよいよ義務教育が終わります。この場合の「義務」はもちろん保護者たる大人のものであって、それが外されれば諸君は否応なく「自立」しなければなりません。「自立」と言えば、他者に頼ってはいけないようなイメージで、何となく孤独な気分にもなるでしょう。また、「自立しなさい」と言われれば、そこには他者に迷惑を掛けない倫理観を既にしっかり持っていることが求められる感じがします。しかし、私が諸君に期待したいのは、むしろ自由に、伸び伸びと行動することです。思い通りに行動すれば、経験が少ないうちはもちろん失敗することも多々あると思います。しかし、その失敗の経験を通してこそ、人はかけがえのない“ひとり”となっていくことができるのです。その「かけがえのないひとり」こそが、「自立」の語が示すところです。自立した者同士の交流は、互いの「かけがえなさ」を理解したうえのことなので、孤独に陥ることはありません。諸君には、これから本来の自立を期して、自らの思う通りに存分に活躍されることを望みます。

春爛漫の季節がもうすぐそこです。それぞれにものを思いつつ、ひとときの休暇を過ごしてください。

以上をもって、本日の式辞とします。

令和4(2022)年3月24日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦